

九州の森と林業

No.98 2011.12

シカの個体数管理体制の現状と今後の展望

森林動物研究グループ 八代田 千鶴

1. はじめに

近年、全国的にシカの個体数が増加しており、農作物被害だけでなく苗木を食べられるといった林業被害も各地で報告されるようになってきました。このような被害を防止するために、シカの嫌う匂いや味を含んだ忌避剤の散布やシカが入れないような柵の設置などの対策が従来から行われてきました（写真-1）。しかし、これらの方法は大きなコストがかかるため、どこでも対応できるわけではありません。また、林業では生産現場とシカの生息地が重複しているので、被害の軽減には捕獲による個体数調整が必要不可欠です。ここでは、シカの個体数管理体制の現状と今後の展望について解説します。

2. シカを管理する

シカを適切に管理するとは、シカが多すぎて被害が深刻になる過密レベルと、少なくなり過ぎて絶滅が心配される過疎レベルとの間で個体数を管理することです（図-1）。どのくらいが適正レベルかは、それぞれの地域での考え方、植生やシカの生息数によって違ってきます。シカが農林業被害を起こす迷惑な動物だと考える地域では、シカの数はいくつでも少なく維持することになります。しか



写真-1 森林内に設置されたシカ防除ネット（福岡県田川郡）。

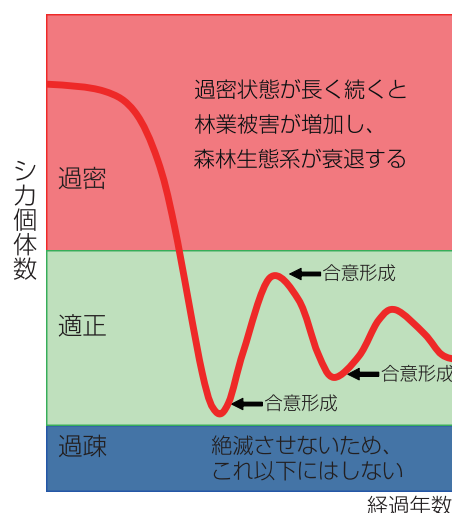


図-1 シカ管理の考え方。どのレベルが適正かはそれぞれの地域全体の合意で決めます。

し、シカを捕獲して肉や皮などを林産物として利用し、その収益を被害対策に還元しようとする地域では、過密状態にならない範囲でたくさんのシカを生息させることで収穫を多くすることができます。どのレベルを適正とするかは、その地域の森林管理にかかわる人たちの合意が重要となるのです。このように、地域で合意形成をはかりながらシカの個体数に応じて管理を進めていく方法を順応的管理と呼びます。この方法は多くの地域で採用されており、管理計画の策定に際して基本的な考え方になっています。

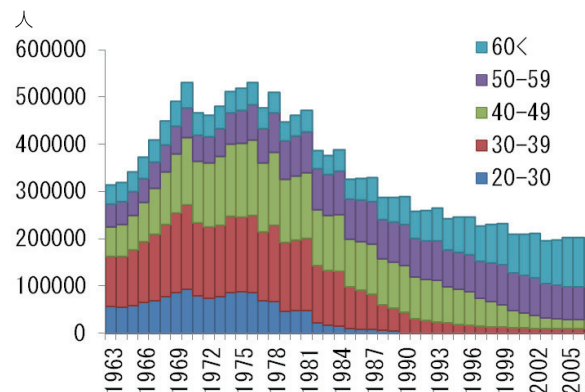
3. 個体数管理体制の現状

シカの個体数管理は、各都道府県がシカの生息数や捕獲数などの調査結果から管理計画を策定し、この計画に沿って実施されています。計画はモニタリングの結果を検証し、必要に応じて変更しながら進めることになります。現在は、どの地域でもシカの個体数が多すぎることから、捕獲の実施が不可欠となっています。このような管理計画に基づいた捕獲による個体数管理は、これまで狩猟者が担ってきました。しかし、狩猟者の数は1970年代の約53万人をピークに2006年には約19万人へと減少の一途を辿っており、さらに60歳以上の方が半数以上を占めるなど、管理体制を支えてきた大黒柱は細くなる一方です（図－2）。そこで、自衛のために捕獲を担う農林業従事者が体制の一部を支えるようになりましたが、増え続けるシカに追いついていないのが現状です。今後は、捕獲を担う人材を育成するとともに、捕獲に関する法的整備などといった様々な課題に取り組んでいく必要があります。

4. シカを捕獲する

個体数管理のためのシカ捕獲方法は、わなを使う方法と銃器による方法の2種類に大きく分けることができます。わなによる捕獲は、くくりわなや箱わなのような小型のものから、北海道で実施されている大型囲いわななどがあります（写真－2）。一方、銃による捕獲では伝統的な巻き狩りが主流で、現在でも多くの地域で実施されています。これ

は、勢子（せこ）や犬を使って射手が待ち伏せている場所へシカを強制的に追い込んで捕獲する方法で、たくさんの人やよく訓練された犬が必要となります。他に銃を用いた方法としては、獣道などに待機し通りかかったシカを捕獲する待ち伏せ猟や、足跡や痕跡を頼りにシカを追跡して仕留める忍び猟などがあります。これらの方法はいずれも、周辺の地形やシカの習性を熟知したベテラン猟師の存在が不可欠です。そのため、被害対策として実施する個体数管理体制の一環として続けることは、狩猟者の減少が続く現状から将来的



図－2 狩猟免許所持者の推移（年齢）。
出典：狩猟統計（1963～2006：農林水産省）



写真－2 森林内に設置した大型囲いわな
（北海道釧路市阿寒町）。
わな内のブロックはシカを誘引するための餌
（ビートパルプ）。

に難しくなると考えられています。そこで、一度に多頭数を捕獲できる大量捕獲技術や少人数で実施できる低コストな捕獲技術などの新しい捕獲方法を確立する必要が生じてきました。

5. 新しい捕獲技術の可能性

森林総合研究所では、昨年度から少人数で実施できる捕獲方法として、餌場にシカを誘引し捕獲する技術の確立に取り組んでいます。この方法では、シカを自発的に餌場へ引き寄せる誘引技術が重要となるので、シカの行動特性を知る必要があります。これまでの調査結果から、シカの餌となる周辺の植物量が誘引効果に大きく影響することが分かってきました。また、イノシシのような他の野生動物が餌場に出てくると（写真－3）、餌があってもシカは出てこなくなります。このように様々な要因がシカの行動に影響することから、どのような条件がシカの自発的な誘導につながるのかを検討しています。また、この方法では餌場に出てきたシカを確実に仕留める狙撃技術も重要となります。餌場と狙撃場との距離が近いとシカが人の気配に気づいて出てこなくなるため、少なくとも50m以上離して配置する必要があることが分かってきました（写真－4）。この距離で確実にシカを仕留めるためには、命中精度の高いライフルの使用が不可欠です。地元のハンターが狩猟者を案内するガイド付き狩猟での捕獲成功率は、散弾銃が77%だったのに対し、ライフルでは96%と報告されています（伊吾田ら、2011）。現在、ライフルは銃刀法によって10年間の銃猟経験を経ないと原則として所持できないことになっています。しかし、狩猟者が減少する中でシカの個体数管理体制を維持していくためには効率的捕獲の実施が必須であり、ライフル所持の規制緩和も検討する必要があるでしょう。

6. おわりに

明治時代、私たちは無計画にシカを捕獲したために絶滅に近い状態にまで追い込んでしまったことがあります。その後、保護増殖をはかり捕獲を制限する政策が功を奏しました

が、今度はシカの数が増加し農林業被害が増加してしまいました。このような両極端な状況を繰り返さないためにも、これからのシカ管理では、合意形成による管理計画の策定と確実に計画を遂行できる管理体制の構築が重要な課題です。

参考文献

伊吾田宏正ら（2011）日本哺乳類学会2011年度大会講演要旨集，150.



写真－3 餌場に出てきたシカの親子とイノシシ（宮崎県東臼杵郡）。



写真－4 狙撃場からみた餌場（赤の点）。約50m離して配置しています。

「九州の樹木」シリーズ（2）

ハルニレ

ハルニレはニレ科ニレ属の落葉高木で、大きくなると直径1m、高さ30mにも達します。若い個体は成長が速く、伐られても良く萌芽します。名前になった「ニレ」の由来は、樹皮を剥ぐと内樹皮が「滑れ（ヌレ）」たように見えるからとの説があります。日本では北海道をはじめ北地に多く分布することが知られていますが、実は九州でも南部を中心に広く分布しています。肥沃な土地を好み、河川周辺の平坦地に良くみられます。

日本にはニレの仲間が3種類分布しています。春に花をつけるのがハルニレです。開花時期は北海道で5月上旬ですが、九州では3月から花を咲かせます。他に、ハルニレと同じ春咲きのオヒョウと、秋咲きのアキニレがあります。アキニレは街路樹としてよく使われています。

ハルニレとオヒョウの樹皮は剥ぎやすく、内樹皮にはリグニンが少ないので、野生動物にとって消化しやすい特徴があります。そのため北海道では食料の乏しい冬に、エゾシカがハルニレの樹皮を食べて木を枯らしてしまうことが大きな問題になっています。九州でもニホンジカが増えています。まだハルニレを剥皮した報告はありません。北海道と違い、九州ではニホンジカにとっての食料が一年中豊富であるということかもしれません。

ハルニレの材は近縁種のケヤキに似ていま

すが、やや粗い材質です。近年は、ロシアや中国からの輸入ニレ材による机や家具がみられます。国内で用材生産を目的とした造林がされることはほとんどないですが、材としての利用価値もあるので、もっと活用できるとよいですね。



ハルニレの葉。葉縁は不揃いな重鋸歯。



球磨川沿いに分布するハルニレ個体。

森林生態系研究グループ 野宮 治人

連絡調整室から

(1)九州・沖縄農業研究センター一般公開が、平成23年10月15日(土)に開催され、当支所は九州育種場とともに参加し、展示等を行いました。当日は近隣の市町村から2,220名が訪れにぎわいました。

(2)平成23年度九州地域研究発表会が、平成23年11月16日(水)にくまもと県民交流館パレアにて開催されました。

九州の森と林業 No.98

平成23年12月1日

独立行政法人 森林総合研究所 九州支所

熊本県熊本市黒髪4丁目11番16号

〒860-0862 Tel. 096(343) 3168(代)

Fax. 096(344) 5054

ホームページ <http://www.ffpri-kys.affrc.go.jp/>

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。